

中村直勝著

光 嚴 天 皇

「滋賀県の瀬田川畔に住んでおつたある人が、火中から拾ひ出してきたような、上下を焼き失うた、元弘元年九月廿八日の後伏見院院宣を一通、私にくれた。昭和元年のころであつた。この日付は後醍醐天皇の笠置行宮の陥つた日である。しからばこの一通によつて、その日すでに京都においては院政が行なわれておつたことが、何物よりも雄弁にかつ明白に物語らる。それは京都に後醍醐天皇ならぬ別の天皇が御座したという反証にもなつてくる。たいへんなことになるぞ、と心がふるえた。」という「自序」でこの書物ははじまる。南北朝史の研究家としては、文字通り「大御所」であり元老である中村直勝博士が、爾来三十五年、深く心中に抱き、堅く脳中に藏し、反芻した問題」をここに公刊されたのが本書である。

光厳天皇、いわゆる北朝第一代の天皇とし

て後醍醐天皇の京都脱出後に踐祚し、六波羅・鎌倉幕府滅亡後は後醍醐天皇によって廢位され、後醍醐天皇南行ののちは北朝光明・崇光兩天皇の二代の院政をとつた「治天の君」であり、その後、觀応の諍亂の時に南朝に幽閉され、賀名生で出家落飾して法皇となり、許されて帰洛後は丹波国山国庄に隱棲して淋しく五二年の生涯を終えた悲劇の主人公、光厳天皇の一代を、著者は当時の社会相・政治情勢・皇室御領の複雑な伝領關係などの中から追究し、天皇の感懐にまで立入つた興味深い描写を展開してみせる。本書は、この教奇な運命を辿つた主人公のすぐれた伝記であるばかりでなく、鎌倉末・南北朝期の政治史としても必読の価値をもつている。

本書は、「序章」につづく「第一章 御生誕まで」で兩統迭立以後の政治史を概述し、「第二章 春宮量仁親王」では後伏見上皇の量仁親王立坊までの焦慮や苦衷を、さらに立坊後は登極の日の一日も早からんことを念ずる上皇の夜鶴の思いを描き出す。「第三章

光厳天皇」では後醍醐天皇の討幕計画の失敗と光厳天皇の踐祚とを述べる本書の中心をなす論旨が展開される。著者の主張を要約すれ

ば、光厳天皇の即位はすべての条件を完備しており、従つて北朝第一代としてではなく九六代の天皇後醍醐天皇のあとをうけた九七代の天皇として扱ふべきこと、それ故に京都還幸後の建武新政を領導した後醍醐天皇は重祚の天皇として取扱ふべきである、ということである。「第四章 光厳上皇」は新政の夢破れて後醍醐天皇南幸ののち京都にあつて光明・崇光兩帝の院政をみた時代から、正平の一時の和平に際して南朝に幽閉され、尊氏によつて後光厳天皇が擁立されるまでを述べ、この時代が南北朝併立の時期であること、後光厳・後円融・後小松天皇の前半は、偽器の三種神器すら持たぬため天皇と認められぬことを論ずる。そして、そのような偽朝の存在そのものの胚芽が光厳上皇にあり、その苦惱が上皇をして出家落飾せしめたとする「第五章 光厳院法皇」の章を展開させてゆく。

以上のような紹介では本書の豊富な内容を充分伝えることができない。第二章・第三章の叙述などは、その豊富な史料の裏付けと、博士の流暢な筆の運びとが一体となつて、読者を魅了するであらう。しかし、私にはなおかついくつかの不満がのこるのも事実であ

る。博士の南北朝正潤論の立論の基準は、皇位の象徴たる三種神器の存否にかかつている。このような、戦前の「大義名分論」的発想に不満を感じるのは、果して紹介者のみであらうか。

本書は多数の優秀な古文書の蒐集家でもある著者の所蔵文書をはじめ、多くの古文書を駆使して縦横の論を展開するが、光厳天皇の伝記という本書の性格もあつて所論が上層貴族階級に限られているうらみがある。著者がかつて名論文「荘民の生活」(史林八ノ一)で展開した視角、即ち庶民の生活にまで立入つた視角を本書でも援用されたならば、所論は一層の興味深さを期待し得たものではなからうか。今一つ、気になるのは、著者が皇紀紀年を使用していることである。勿論、著者の見識によるのではあろうが、西暦紀年を使いなれた者には、換算の煩しきがあるばかりでなく、むしろ奇異にすら感ずる。多数の読者——それには多数の若者が含まれるであらうから、西暦紀年を使用するほうが親切ではなからうか。(A5判二一六頁 昭和三十六年四月淡交新社刊 定価五〇〇円)

(石田善人)

三木与吉郎編

阿波藍譜 史話図説篇

昨年末『阿波藍譜』史話図説篇が刊行され新春早々、一読する機会をもつた。三木産業株式会社三木与吉郎氏と、三木文庫後藤捷一氏の御尽力により、『三木文庫所蔵庶民史料目録』二冊が上梓され、ついで『阿波藍譜』栽培製造篇が学界に送られたのは、まだ目新しいことであるから、相づく出版には関係者各位の御心労はなみなみならぬものがあつたらうと推察している。本書も既刊のそれに劣らない立派な出来栄であり、豪華な製本、図版の鮮麗なること、また原物の手板紙を一枚宛、書物に付してある凝りようには、さすがに感歎してしまつた。

さて本書は史話図説篇とあるように藍に関する史的考察がなされ、これに付随して毎頁写真図版が挿入されている。史話という限り内容はくだいたものとれるが、しかし平明な文章でいて、内容は非常にがつちりした研究書であり、信頼のできるものであることは断言してはばからない。筆者の自負の程もう

なづけるといふものであり、今後の阿波藍の研究においては必須の文献とならう。さて、内容は、藍原草、藍発堯酵法、紺屋雜記と、まず藍染の基本について記され、ついで阿波藍について栽培、製法、生産額から販売状況を明らかにされ、明治以降、人造藍の移入と藍作の衰退を概観されている。もちろんこの阿波藍の展開は、蜂須賀藩の政策が問題になるが、ここでも発生から統制策が検討され藍商の組織、取引慣行、店方の内部組織まで流通面の分析がなされている。その他、他國の藍、阿波地方の逸話、民家に付属しているブチュウの構造などが記されている。附録としての統計表は、前著のそれに明治初年物産表よりの藍関係統計が付せられ、更に完備されたものとなつている。

このように本書は阿波藍のみならず広く藍についてのすぐれた概説書となつている。それなりに今少し精細に展開していただきたい点もないではないが、史話という以上、これも望蜀の感を免れないであらう。産業史というものは、とくに技術問題が重要であり、私など自分の研究でその弱点をよく感じるのであるが、この本はさすがに實際業務に